

2018 Vol.13

GLOCAL



Forum

- 国際人間学研究科における教育・研究「活性化」の取り組みを振り返る ————— 林 上
- オックスフォード大学東洋学部の四半世紀: エジプト学徒としての経験から ————— 中野智章
- 人は何故／いつ／どのように／相談に向かうのか?: 「来談動機」への着目 ————— 森田美弥子

From abroad

- 1950年代の台湾文学: 金溟若「石教授」を読む — 和田知久

Notes

- 弘治・永禄年間における織田信長の居城 ————— 林 沙也加
- 多変量分析手法を用いた*The Mystery of Edwin Drood*の続編の著者推定 ————— 後藤克己

News & Record

- 第9回 教員研究会を開催
- 第8回 「院生の力」研究報告会を開催

GLOCAL

GLOCALは、GLOBALとLOCALを組み合わせた造語であり、地球規模でのグローバルと身近なローカルを、ともに等しく重視する考え方を意味しています。



ごあいさつ

中部大学大学院、国際人間学研究科レポート『GLOCAL』Vol.13 をお届け致します。

2012年10月に先代の研究科長、林上教授により創刊された『GLOCAL』も今回で第13号となり、このたび、研究科長を引き継ぐにあたり、小誌の編集もバトンタッチいたしました。

林前研究科長は、2011年4月からこの3月までの7年間にわたり、国際関係学部と人文学部の二学部の上に跨って設置されている本研究科の教育・研究改革に取り組んでこられました。専門領域や立場の違いを超越した「教員研究発表会」(年2回)、他専攻の院生・教員も交えた院生による研究報告会「院生の力」(年2回)、学内外の研究者や市井の活動家等を交えてのシンポジウムや講演会、さらにはこれら各種イベントを広報するための小誌『GLOCAL』の刊行とそのデジタル・ブックのWEBページ掲載等々、本研究科活性化のための数々の方策を精力的に導入・運営してこられました。こうした取り組みの意図やデザインの詳細につきましては、研究科の歴史を語り継ぎ、また今後の運営の方向性を考える上で大変貴重な情報ですので、林前研究科長に特にお願いして本号にご寄稿いただきました。ぜひ、お読みいただければと存じます。小誌の刊行も含め、林前研究科長がつけてくださったこの道筋を微力ながら守り、充実させて参る所存でございますので、ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

さて、今後の国際人間学研究科にとって当面の大きな変革は、心理学専攻における公認心理師対応の教育課程の導入をめぐる一連の動きとなる見込みです。本学でも2018年度から人文学部心理学科に国家資格である公認心理師対応の教育課程が導入されたため、遅くともその1期生が卒業する2022年までには大学院心理学専攻でも資格対応の教育課程を導入する必要があります。また合わせて院生の実習の場ともなる、地域住民を対象とした外来の大学附属心理相談室を設置することが求められます。さらに、遅くとも2023年度には学部から上がってくる1期生らが国家試験に臨みますので、その準備・対策が不可欠となります。GLOBALな場での研究の進展を吸収し、またそれに寄与する教員・院生ら研究者が、地元地域のLOCALな場での人々の健康・福祉や生活の充実に貢献することになる本課程は、まさしくGLOCALな取り組みの典型となるはずです。本研究科全体の活性化にも繋がるものとして大いに期待がもたれるところです。

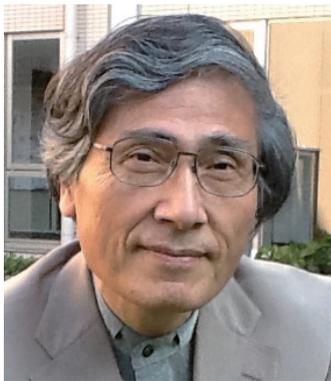
また、さらなるGLOCAL展開に資するGLOBALな動きとして、近々、国際関係学部と人文学部が海外のいくつかの大学・研究機関と独自の学術交流の協定を結ぶ運びとなっています。

小誌を通して、こうした本研究科の動静もお伝えしていければと存じます。新米編集者ゆえ、至らぬことも多々あるかと存じますが、今後とも小誌をどうかよろしくようお願い申し上げます。

2018年10月19日

柳谷 啓子 (中部大学国際人間学研究科長)





Profile

国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻教授

林 上 (HAYASHI Noboru)

1975年名古屋大学大学院文学研究科博士課程修了。『中心地理論研究』で文学博士（名古屋大学）取得。日本都市学会賞受賞。名古屋地理学会会長、港湾経済学会中部部会長。専門は都市経済地理学。



国際人間学研究科における教育・研究「活性化」の取り組みを振り返る



白紙のキャンパスに絵を描く

中部大学大学院国際人間学研究科の研究科長として2011年4月から2018年3月までの7年間、研究科における教育・研究の「活性化」のためにいくつかの取り組みを試みてきた。それは、白紙のキャンパスに向かって絵筆をとり、素描から全体像へとイメージの断片をつないでいくような作業だった。未だ完成には程遠いが、この機会に作業過程を振り返り、完成に向けて役立ちそうなヒントを拾い上げることは無意味ではないであろう。

研究科があるべき本来の目的を端的に言えば、それは院生による研究を教員が指導して論文としてまとめ上げ、彼らや彼女らを社会に無事送り出すことである。その過程において、院生への研究指導のために教員自らが研究に励み、その学問的成果を指導に反映させることは、もとより当然なことであろう。しかしこうした通常教育・研究サイクルのほか、教員・院生の師弟関係や同一専攻内といういわば狭い枠組みを超えた、より広い場での学問的交流があってもよいのではないかと考えた。できるならさらに枠を広げ、研究科と大学という縛りにもとられない知的交流の機会は設けられないだろうか、とも思った。

そこでまず取り組んだのが、教員研究発表会と院生による研究報告会の年2回の開催である（図1）。教員は専門分野の研究内容を専門外の教員も集まる場において発表する。また院生には、他専攻の院生や教員が集

まる研究会において報告することを定例化した。一方、対外的な交流としては、外部の研究者、まちづくり活動家、企業経営者などを招いてシンポジウムや講演会を開催することを提案した。こうしたシンポジウムや講演会は開催することそれ自体に意義があるが、その内容を対外的に発信すれば研究科の社会的意義も高まると考え、「アカデミック広報」と名付けた雑誌 GLOCAL を年2回発行することにした。同じ内容を研究科のホームページに掲載すれば、本研究科の活動をより広く知ってもらうことができ、あわよくば大学院進学者の確保にもつながるのではないか、という思いもあった。

に示すように、A～Dのプログラムが院生の入学から修了までの過程を、通常教育・研究とは別に側面からサポートするかたちになっている。いうまでもなく、これらのプログラムは当初から綿密な計画や構想があって実現されていたものではない。出発点となる大きな前提は、研究科の現状をできるだけ正しく認識し、問題点があればそれを克服するために、何ができるかを考えることであった。理系の大学院のように大掛かりな実験装置や設備があるわけではない。自由にできる予算も限られており、結局は自前に備わるマンパワーをできる範囲で有効に活かし、文系大学院が得意とする活動につなげていくという戦略である。幸い、本研究科に所属するメンバーは数が多く、専門分野も多岐にわたっている。教員研究発表会にしても、シンポジウムの開催にしても、多彩な内容で展開することができた。

教員研究発表会は年間2回の開催で、毎回2名の同僚研究者から専門的内容が傾聴できる貴重な機会である。普段、研究科委員会などで机を並べ顔は知っている間柄であるが、学問的専門が何かをよくは知らない。そのような同僚教員から聴く話は興味深く、刺激的でさえある。教員が学生に教えるときの教育的雰囲気とは違う一種独特な知的雰囲気が漂い、研究を生業とする職業人の知的好奇心を刺激する。教員研究発表会は年2回の開催で少ないように思われるが、回数を重ねることで自然に得られる知的収穫は決して小さくない。耳学問を侮ってはいけない。普段はあまり考えない専門外のことであるがゆ

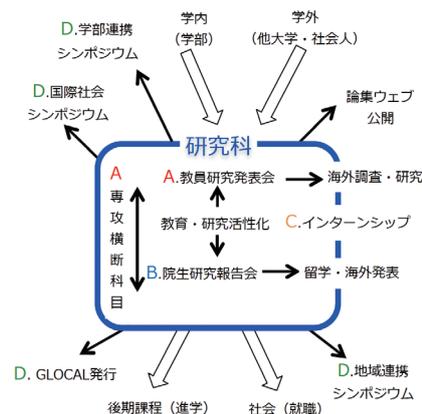


図1: 教育・研究活性化のためのプログラム

耳学問を侮るなかれ

以上は7年間の結果として積み上げられた活性化のためのプログラムである。図1

えに印象が深いだけでなく、自分が所属する専攻やそのベースにある学問全体の成り立ちを考え直すきっかけになることもある。食わず嫌いは、長い目で見れば、やはり損なことが多い。

成果を GLOCAL に集めて発信

「アカデミック広報」と名付けた雑誌 GLOCAL の名称は、いうまでもなく GLOBAL と LOCAL を合わせてつくった造語である(図2)。すでにどこかで使われているのを承知で採用したのは、国際関係学部と人文学部の上にある研究科という性格を意識したからである。世界同一市場はすでに存在しており、そこから逃れることはできない。



図2: GLOCAL Vol.1~4の表紙

しかし世界が無数の局地によって成り立っていることも事実であり、LOCAL なくしては GLOBAL もない。GLOBAL に踊らされたり振り回されたりすることなく、LOCAL の奥底に潜む普遍性に注目する。見出された普遍的価値が世界に伝えられ理解されれば、LOCAL は GLOBAL へと昇華する。かつてよくいえばそのようなシナリオであるが、実際には LOCAL の何に注目するか、ここが問題である。そこで注目したのが、大学周辺の旧街道・古戦場や地元自治体・地区の文化・伝統などである。これらをシンポジウムのテーマに掲げ、研究者、郷土史家、まちづくり関係者をパネラーに招いてシンポジウムを開催した(図3)。毎回、多くの参加者があり、自らのルーツにつながる歴史に関心を寄せる市井の人々がいかに多いか、驚かされた。

シンポジウムを企画して活気づける

いくら「アカデミック広報」というメディアを器として用意しても、中身がなければ読んでもらえない。当初は150部くらい印刷し、外部にも郵送した。しかし同じ内容を研究科のホームページにも掲載するようにしたため、送付辞退の連絡も何件か頂いた。このため郵送部数は若干減らしたが、院生確保につながるかもしれない可能性を考えるとゼロにするわけにはいかない。一方、ウェブ掲載の GLOCAL は閲覧数が年々増加し、雑誌として引用されることもめずらしくなくなった。こうなると発行を継続するしかない。掲載内容を豊かにするため、研究会やシンポジウムにも工夫を凝らす必要が生じてきた。幸い、所属教員の中から国際的なテロや近代国家の成立過程などに関するシンポジウムを提案して実行する事例が現れるようになった。企画・実践者が明日の研究科をリードしていく若手教員であることは、頼もしい限りである。お仕着せのシンポジウムではなく、院生、学生、職員も参加しやすい気楽な雰囲気での開催は新鮮である。教員自らがシンポジウムにふさわしいデザインのポスターを手づくりし、大学のウェブに掲載するというスタイルも定着した。

研究好きな院生による自主勉強会

大方の予想に反し国際人間学研究科では、修了後の就職を主な動機に進学してくる学生は多くない。これは理系研究科との違いでもあり、純粋に学問研究をしたいという気持ちが院生の間で強いことは、傍から見ていても

よくわかる。そのような院生の勉学意欲は、通常のマンツーマンに近い演習によって満たされるだけでなく、院生による研究報告会、通称「院生の力」によって大いに高められる。他専攻の院生や教員をまえに、自らの言葉で研究内容を紹介し質疑を受けることは、自信増加につながることで必定である。社会人院生が同じ研究室の中で机を並べているのも本研究科の特徴のひとつであり、人生の先輩から専門以外のことがらを学ぶことも多い。逆の効果もあり、社会人院生は、ともしれば忘れがちな若い感性を年下の同僚院生から受ける。院生の勉学に関して特筆すべきは、院生自らが企画した研究会(通称「イン活」)が毎月のように開催されていることである。開催場所は全学の教育施設である不言実行館の開放的なフロアやスタディールームであり、他研究科、他学部の学生も自由に参加できる。院生の間で自発的活動が生まれてきたことは、大きな収穫である。

活性化のカギは明日への向上心

以上で述べてきたように、本研究科における研究・教育「活性化」のためのプログラムの輪郭はおぼろげながら描けたように思われる。しかし根本的課題はなお残されたままである。基本となるカギは、人間として、また研究者・学徒として、いまより一歩だけ前に進みたいという向上心である。向上心を共有する教員、院生が自らアイデアを持ち寄り、「何かおもしろいこと」をひとつひとつ積み重ねていくことが、この研究科にふさわしい活性化への道ではないだろうか。



図3: シンポジウムのポスター



Profile

国際人間学研究科 国際関係学専攻 教授

中野 智章 (NAKANO Tomoaki)

南山大学大学院文学研究科文化人類学専攻博士後期課程修了。博士（文学）。専門分野はエジプト学、考古学。古代エジプト文明の盛衰やヨーロッパに与えた影響について研究している。南山大学文学部人類学科卒業後、オックスフォード大学東洋学部でエジプト学を学ぶ。日本学術振興会特別研究員、古代オリエント博物館学芸員を経て中部大へ。エジプト展の監修やピラミッドや神殿の遺跡調査を行っている。



オックスフォード大学東洋学部の四半世紀 エジプト学徒としての経験から



東洋学とは何か

「東洋学」と聞いて、その範囲を明確に答えることは必ずしも容易ではない。ここでの「東洋」とは「ヨーロッパから見た東」の意味で、イギリスで「東洋学 (Oriental Studies)」と言えば、筆者が専門とするエジプトをはじめ、シリア、イラン、イラクといった西アジアの国々や、中央アジア、インド、中国、朝鮮半島、そして日本までもが含まれるのが通常である。もっとも中国では、「東洋 (東の海)」は日本を意味するため、これはヨーロッパの大学（とりわけ中世に起源を持つ古い大学に多い）に特有な学問区分のように思われる。その発端は14世紀初めに見出すことができ、1311年にフランスのヴィエンヌで開かれた公会議では、「パリ、オックスフォード、ポローニャ、アヴィニョン、サラマンカの大学にアラビア語やギリシア語、ヘブライ語、アラム語の講座を設置する」ことが決議された。

ローマ帝国の分裂後、中世から近世、近代へと時が流れる中でヨーロッパはオスマン帝国と対峙し、やがて東方に進出したが、そうした時勢の中で言語を始めとするさまざまな知識は蓄えられ、研究されるようになった。エジプトでは、ナポレオンが1798年に軍事遠征を行った際に測量技師や画家、研究者などを同行させ、その成果を大著『エジプト誌 (Description de l'Égypte)』として刊行し、またその際に発見されたロゼッタ・ス

トーン等を用いることでシャンポリオンは1822年に象形文字の解読に成功した。その後も古代ペルシア語やアッシリア語、ヘブライ語といった言語の研究が進み、東南アジアにおいてもボロブドゥールやアンコール遺跡の調査が行われるなど、「東洋学」はヨーロッパの植民地支配と密接に絡み合いながらその範囲を徐々に広げていったのである。1873年にはパリで第1回の国際東洋学会議が開催され、1898年にはインドシナにフランス極東学院が設立された。1759年と1793年にそれぞれ設立された大英博物館とルーヴル美術館においてもオリエント (東洋) 展示は当初から目玉の一つであり、1851年にロンドンで開催された第1回の万国博覧会では、イギリスが世界随一の産業大国としてさまざまな機械を展示するとともに、エジプトやアッシリアの古代遺跡が復元され、奇妙なコントラストをなして人びとの関心を誘った。

オックスフォード大学東洋学部

語学研究を出発点として展開したオックスフォード大学において、「東洋」研究はその後もさまざまな地域や国の講座を開設し、拡張していった。同大学のホームページや関連する資料を改めて調べてみると、現在開講されている専攻としては、学部と大学院で区分がやや異なるものの、近東・中東研究、イスラム社会研究、ヘブライ語・ユダヤ研究、東方

キリスト教研究、エジプト学・古代近東研究、ヨーロッパ・中東言語研究、南・内陸アジア研究、東アジア研究などその対象とする範囲の広さに改めて驚かされる。ただしそこにはその時々地域的な関心が反映されている面も少なくなく、例えば日本語の講座は1909年に設置されたが、受講する学生がいなかったため講師の引退とともに一旦消滅したことが記されており、興味深い。

もともとキリスト教の神学校として出発した同大学では、文法や修辞学、論理学の三科、そして算術や幾何学、天文学、音楽の上級四科が神学、教会法、医学の専門教育に対する教養教育の柱となっていたが、17世紀の末に近代科学系の科目が加わり、英文学や歴史学、社会科学といった科目が導入されたのは19世紀になってからのことであった。

その後、20世紀に入ると学内における教育改革は「東洋」研究などの学部 (Faculty) 編成へとつながり、1960年に東洋研究所 (Oriental Institute) が設立され、今日に至っている。これは、例えばエジプト学や古代近東研究の研究所として知られる Griffith Institute が設立された1939年より21年、エジプト学教授のポストが設置された1901年から59年後のことであった。

四半世紀という流れの中で

筆者が最初にオックスフォード大学に留学

したのは1991年のことで、90年代後半と2000年代前半に研究員として二度、そして昨年度の春学期に中部大学の海外研究員制度を利用し、四度目の長期滞在機会を得た。

この四半世紀を実際に体験して感じるところは多々あるが、90年代初頭に吹き荒れていた、教育の機会均等を柱に大学への補助金を大幅にカットしたサッチャー首相の教育改革はオックスフォード大学の運営にも大きな影響を与えた。労働、保守の二大政党に自由民主党が絡み合う中で政権交代にあっても教育現場に対する財政削減の波は強くなる一方で、2006年、2012年と実施された学費の大幅な値上げや学生ローンの拡大もあり、エジプト学科といった、最初の留学時には学部学生が1年次から3年次生全員を集めてもせいぜい10名程度、院生と教員を足しても総勢20名あまりだった所帯が、今では倍近くの人数に膨れあがっている。

オックスフォードやケンブリッジ大では、伝統的に学部よりも学生が寄宿生活を送るカレッジでの教育が大きな鍵を握っており、ここでは教員(学部だけでなく、どこかのカレッジに所属している)がほぼ個人指導に近い形で学生を教えるという、贅沢な教育がいわば教育の柱であったため、当初はその形が大きく崩れてしまったかのように感じた。

しかしながら、これまでの学生や研究員といった身分ではなく、今回一教員として在籍した学部とカレッジの双方で同僚と付き合いの中で感じ見聞きした実態は、むしろこれを大学の変革の機会として積極的に捉え、利用する姿勢に溢れていた。

教育面においては、他専攻との共同コースや1年で修士号が取得できるコースを設けるなどして学生数を増加させ、学費による直接的な収入の増加を図る一方、大学としてもそれまでは躊躇していた資金集めのキャンペーンを全学規模で展開し、予想以上の寄付金を得たことで新たな研究所の設立や教員ポストの確保、奨学金の増加につながったのである。

無論、これはオックスフォードというブランド故の成功だったと思わざるを得ない面も

なくはない。ただしかつて机を並べ、現在は教員になっている友人に尋ねてみても、以前は行うことがなかったオープンキャンパスやサマースクールを実施し、また学費の高騰により一部の限られた階層のみが学生として集まることを防ぐため、パブリックスクールではない、地元の一般校への働きかけやメディアへの出演も増加させているとの返答には、正直なところ驚かされる面が多かった。

学部の再編や研究所、博物館などのリニューアルも進んでいる。今や「東洋学」部は学生が所属する場としての位置づけであり、実際の教育や研究は従来の研究所だけでなく、新たに設けられた研究所や関連する研究施設でも行われるようになった。また、「東洋学」のような地域研究的な色彩の強い学問分野を補強するために、「学際的地域研究(Interdisciplinary Area Studies)」なる新学部も設立され、日本を対象とする現代的な研究や教育の一部はそちらでも実施されている。フランスやドイツの大学との交換教育も、以前に増して積極的に行われるようになった。

カレッジにおいても、筆者が所属する St Edmund Hall では中国の四川大学と提携して共同研究や教育プログラムを実施し、若手教員を派遣するといった試みがなされている。日本から見れば、非常に充実した施設、教育・研究体制が既に整っているかのように見える同大学ではあるが、絶えず変革し続けようとする姿勢を強く感じた半年間であった。今後はEU離脱に伴い、研究者の流動性や資金の調達、共同研究などに大きな影響が出てくる可能性があるが、どのような対応をするかを注目している。

象形の思想を鍵として

「東洋」学部のエジプト学科として、最初の留学時には地域言語としての(ただし既に死に絶えた言語ではあるが)象形文字の習得が日々の学習の基本となり、大いに苦労した。他大学のエジプト学科は、ケンブリッジ大学をはじめいまや考古学部などに属することが

多く、言語の習得なしで学位取得が可能なものの、オックスフォード大学「東洋」学部は、未だその点にこだわり続けている。自身の学生時代にも、そこには「人びとが用いた言語の習得なくして、当時の文化や社会といった研究は有り得ない」という強い信念があった。

その後、四半世紀を経て遅々たる歩み続ける自身が感じた点はいくつかあるが、そのうちの一つは、「欧米のエジプト学では象形文字の読解に力を入れるものの、その背景に存在した思想についてはまだあまり研究が及んでいない」というものである。

これは、漢字がその「へん」と「つくり」などに多くの意味を内包する象形文字であるのと同様に、古代エジプトの象形文字も絵そのものに意味があり、時には文字同士のつながりや組み合わせにも思想があったことを意味する。

こうした点に関する研究が欧米で進展しない背景には、アルファベットの文化圏において一つ一つの文字はあくまで音を示す表音文字に過ぎず、漢字や象形文字のように文字そのものに意味がある表意文字ではないことが関係していると言えよう。

またエジプトには多くの文様が建造物や衣服、さまざまな器物に描かれたことが知られているが、その使用法を細かく観察してみると、象形文字と同じく何らかの意味をもってその場に使われていたことが分かる。「象形」とは読んで字のごとく「形を象る」ことだが、漢字にも似た思想を古代エジプトの文字や文様にも読み取ることで、新たな研究の可能性を探っている。幸い王のみが用いた文様の特定に成功し、海外でも注目されるようになったため、引き続き研究を進めていきたい。

引用文献

- 江上波夫・高田時雄(編著)『東洋学の系譜』計3巻(1992-96年)、大修館書店。
 中野智章「19世紀に現れた古代エジプトーイギリスとフランスの「エジプト・ブーム」」『貿易風』10(2015年)、pp.217-228。
 パトリシア・モルトン著・長谷川章訳『パリ植民地博覧会ーオリエンタリズムの欲望と表象』(2002年)、ブリュック。



Profile

国際人間学研究科 心理学専攻 教授

森田 美弥子 (MORITA Miyako)

名古屋大学大学院教育学研究科教育心理学専攻博士後期課程単位取得満期退学。教育学修士。専門は臨床心理学。精神科病院での実践をもとに、ロールシャッハ法を中心とする「心理アセスメント」、学生相談での実践をもとに、青年期における「カウンセリングへの来談動機」、臨床心理士養成大学院での実践をもとに、「心の専門家養成教育」をテーマとして、実践研究に取り組んできた。



人は何故／いつ／どのように／相談に向かうのか？ —「来談動機」への着目—



「心理臨床実践」の仕事は、クライアント及びその関係者との心理相談（カウンセリング）、検査・面接・観察による心理アセスメント、予防啓発やそのための研究活動からなり、医療保健（病院や保健センターなど）、教育（学校や教育相談センターなど）、福祉（児相や施設など）、司法矯正（家裁や鑑別所、警察など）、産業労働（企業など）といった多様な領域で展開されている。私自身もいくつかの現場で実践に携わってきた。特に長く深くコミットしてきたのは精神科病院、学生相談室、大学附属心理相談室である。さまざまな現場で多様なクライアントの心の支援に携わる中で、いくつかの素朴な疑問が浮かんできた。

人は何故、心の相談を訪れるのだろうか？

それは、悩みや困りごとが生じたから、という答えは間違っていない。間違っていないのだが、どうもそれだけではない、そうとは限らない、と感じる体験が時々あった。不登校を例に考えてみよう。「学校に行きたいのに行けない」というのは顕在化した問題である。その背景として、「先生に叱られた」「同級生に馴染めない」「苦手な授業がある」などの理由は比較的わかりやすいが、「自分に自信がない」「人と話をしたくない」「やりたいことが見つからない」といった、自分自身との関係をめぐる葛藤や苦悩が内在してい

ることも多い。また、時には親子や両親間のトラブルなど家族内の問題を抱えている場合もある。不登校の要因が学校との関係ではないのであれば、どんなに学校に行くための工夫をしてもうまくはいかない。

「相談内容」（主訴）は「通行手形」に過ぎない、という言葉がある。本人も十分意識できていない深い心の問題にぶちあたってしまった時、それが深刻なものであるほど自覚することがつらく困難であるため、別の形で現れることは少なくない。それが、わかりやすいSOSとなり、本人も周囲も「何か不調が生じている」と気づいて、相談機関を訪れることとなる。

したがって、心の支援にあたっては、顕在化した問題と内在化している問題の両方に視点を向ける必要がある。

心の相談は、いつ終わるのだろうか？

相談面接が開始され、しばらくすると当初の悩みや困りごとは一段落する。さらに続けると、少し深いところにある問題にも取り組めるようになっていく。世の中に完璧な人は存在しないので、心の問題が100%解決するというのは難しいことであるが、大事になる前に自分なりの対処のコツがつかめるようになること、そのための自己理解が進むことが、心理相談のゴールとなる。時間のかかる、

お互いにしんどい作業ではあるが、生き方を考えるお手伝いをさせていただくことはやりがいのある仕事である。面接の終結に近づくと、たいがいはクライアントとカウンセラー双方が、そろそろだなと感じるようになる。

ところが時として、この「もうそろそろかな」という感覚が一致しないことがある。これはカウンセラー側の読みが甘いことに他ならないのであるが、よくなってきたと思った矢先に、何故かまた一大事が起こり、調子を崩す人がある。しかも、それが繰り返されると、もしかしたら、この人は良くなりたくないのではないか？と思えてくる。つまり、心の問題が解決するとカウンセラーに会えなくなり、その後は自分自身で引き受けなければいけないということに対して躊躇や抵抗があるのだと考えられた。

さらにもう一つ、毎回来るたびに私に対する文句やカウンセリングというものに対する不満を述べまくるクライアントがいた。多くはないが、一人ならずいた。不思議なのは、にもかかわらずきちんと毎週決まった時間に通ってくることだった。

私は心理相談というのは、多くの人間関係と異なり、いずれ別れることを目指した出会いだと考えている。自分に向き合い、自分の課題を自ら引き受けていく、いわば「自立に向かうための来談」となることが支援者の役割でもある。しかし、なかなかそこまでいかず、むしろ（無意識にはあるが）引き延ば

し作戦を繰り広げる、「依存するための来談」を継続する人もいることを知った。

何を求めているのだろうか？

心理支援の仕事の中で体験した素朴な疑問をもとに、私が着目したのは、クライアント自身の「来談動機」である。過去の担当事例の記録をもとに、心理相談に何を望んでいるのか、初回面接で語られた言葉をもとに集計分類してみたところ、大きくは以下の3パターンが見られた。

(1)「教えてほしい」：情報収集や具体助言を求めての来談（ガイダンス期待）。

(2)「自分を振り返りたい。語りたい」：自己確認あるいは内面探求のニーズにもとづく来談（カウンセリング期待）。

(3)「どうしたらよいかわからない」：何に困っているのか自分でもよくわからないほど混乱した状況にあり、その解消を求めての来談。（ケアサポート期待）

精神科病院では(3)が多くを占める。大学付属心理相談室（学相とは異なり、地域住民を対象とした外来の有料相談室）は(1)(2)が主である。学生相談室では(1)から(3)まで幅広く様々な相談がある。そこで学生相談での担当事例についてさらに詳しく検討してみた。

来談動機の構成要素

「相談に何を求めるか」（3種の相談期待）に加えて、「何に困って来談したか」（相談内容）、及び「どういう時期に来談したか」（来談時期）の組合せで「来談動機」をとらえることとした（図1参照）。そこでわかってきたのは次のようなことであった。

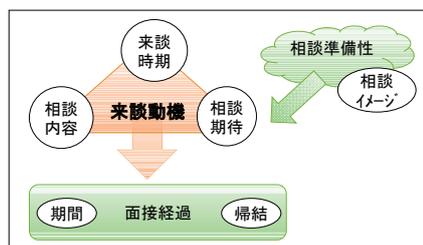


図1: 「来談動機」の概念図

同じ相談内容でも、来談時期（年齢や発達段階）によって持ち込まれやすい内容とそうでない内容とがある。再度、不登校を例にあげるならば、小学生の不登校と大学生の不登校とでは顕在化したきっかけも、背景にある課題も異なることは容易に想像できるだろう。年齢相応の悩みや問題は、誰しものその時期に大なり小なり直面する心理的発達課題である。それに取り組むことは人生そのものである。他方、年齢と一致しない場合は、より深刻な問題と言わざるを得ない。

相談期待は、その人のそれまでの環境や経験の影響を受けて形成される。特に対人関係の中で培われた、相談することに対するイメージや考え方が反映される。つまり、他者への信頼感や、コミュニケーションへの開放性などが関係してくると推測される。相談することには、「信頼」や「安心」などの肯定的なイメージと「不信」や「抵抗」などの否定的なイメージとが含まれる。

肯定イメージが強い人は日頃の対人関係も積極的で、来談への敷居は低い。ただ、その中には何度も来談を繰り返す人もいようだ。他方、肯定とも否定とも決めかねている人たちは、困ってもすぐには来談せず、機が熟した時に満を持してやってくる印象がある。

中学生、高校生、大学生を対象に調査をしたところ、高校生以降の年代になると、「相談も一つの交流」であり、「興味深い」といった、少し距離をおいた肯定イメージが生じてくることがわかった。

相談内容と来談時期、そして相談期待との組合せで来談動機をとらえることにより、発達や状況に見合った、比較的健康度の高い相談なのか、それとも病理的な側面を含んだ悩み方をしているのか、といったアセスメントが可能となり、その後の面接経過（どれくらいかかろうか、順調に進めることが可能か、など）の予測をたてることができる。

悩むことには意義がある

気軽に気楽に相談する、迷いに迷った挙句

に相談する、とるものもとりのあえず来る、という具合に、来談に至る行動には個性があらわれる。もちろん問題の中身や状況にもよるのだが、来談動機や来談行動には、その時々その人が、自分自身（の人生）をどう生きようとしているかが反映されていると言える。

悩むことや相談することを恥ずかしいとか情けないとか感じる人も多いが、前述したように、他者に相談することは実は依存ではなくて自立への方策の一つだと考えられる。

そうした心の作業をお手伝いする支援者の側も、単に悩みを解決するとか問題行動を改善するという表面的なことだけを目標としてお会いしたのでは、心の専門家として十分とは言えない。マイナス部分（悩みや症状など）を減らす修復（治療）モデルだけではなく、マイナス部分をどこかに持ちつつもプラス部分（その人なりの適応力や健康さ）を活かしていけるような発達促進モデルに立って支援の計画をたてる必要がある。クライアントの主体性を大切にするというのはそういうことであろう。ただし、言うは易し、行うは難し、なので気を引き締めてかからないといけない。

本学でも公認心理師養成に取り組み始めたところである。「あてになる公認心理師」を輩出して地域に貢献できるようにしていきたい。

参考文献

- 森田美弥子（2004）青年期における「相談する」行動の意味。名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学）50巻
- 森田美弥子・川瀬正裕・金井篤子編（2009）21世紀の心理臨床。ナカニシヤ出版
- 森田美弥子・金子一史編著（2013）心の専門家養成講座1（臨床心理学実践の基礎その1）。ナカニシヤ出版
- 森田美弥子（2017）臨床心理学で何がしたいのかーリサーチ・クエスチョン探訪。名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学）64巻
- 鶴田和美編（2001）学生のための心理相談。培風館



Profile

国際人間学研究科 国際関係学専攻 准教授

和田 知久 (WADA Tomohisa)

2001年、大阪外国語大学大学院言語社会研究科言語社会専攻博士後期課程単位取得満期退学。中国近現代文学専攻。1980年代以降の作家や作品、文学制度を研究対象とする。「『中国文芸年鑑』通覧：各巻の体裁、編纂体制、収録記事とその分類からみた1980年代中国における文芸システム」(『貿易風』第13号、2018.4)。2018年4月から約半年間、国立台湾大学文学院中国文学系訪問学者として台北市に滞在。



1950年代の台湾文学

金溟若「石教授」を読む

台湾大学の客座学人宿舎(ゲストハウス)はキャンパスの外にある。周囲には台湾大学教職員宿舎と思しき同様の中層建築がいくつも見られた。宿舎から文学院へは徒歩で10分程度であり、総合図書館へも15分程度でたどり着ける。

大学へ歩いて行く道すがら、平屋の日本式家屋もぼつりぼつりと見られた。台湾大学文学院哲学系教授で、戒厳令時代の自由主義者であった殷海光や台湾師範大学文学院院長で、シェイクスピア研究の権威でもあった梁実秋の故居のように整備修復されて一般公開されているものもあつたり、リノベーションされてカフェやレストランになったりしているところもあつたが、住人がいるのかどうかかわからないほど呑むしていたり、一部倒壊しているような建物も結構あつた。このあたりは日本統治時代は昭和町と呼ばれていたようだ。

1950年代、台湾の文学へ

私は政治と文学の関係に興味を持っている。近年では、中華人民共和国における西暦2000年以降の文芸方面での施策の中で、中国作家協会による「重点作品扶助制度」という新しい方式の創作支援制度についての研究を進めてきた。中国作家協会は、もともと中華全国文学工作者協会として1949年7月に創設された「民間団体」であるが、「中国共産党が指導し」「党と政府が広範な作家、

文学従事者と連繫するための橋梁かつ紐帯であり」「社会主義精神文明建設を強化する重要な社会的力量である」とその規約に定められている。

中華人民共和国における文学制度を考察する一方、台湾における文芸方面での施策について調べていると、中華民国政府も文学賞や創作補助、若手作家育成などに積極的に支援をしており、双方に時代や程度、方式の違いこそあれ「国家が文学芸術に積極的に関与する」体制に類似点が見られることに気がついた。もちろん1987年の戒厳令解除以降の民主化により、かつてのような強権的な政治体制は消失し、現在では文化振興助成といった意味合いが強くなっているのは言うまでもないが、今日でこそ様々な団体により開催されている文学堂(文学キャンプ)は、もとは1955年に中国青年反共救国団によってエリート青年を対象として反共教育のために開始されたものであつた。「国家が文学芸術に積極的に関与する」という近代中国に出現した極めて特異な文学制度について考えるには、まずは1950年代の文学状況に立ち返る必要があるようだ。

1949年12月、中国共産党との内戦に敗北した中華民国国民政府は台湾に遷移し、同地を大陸に反攻するための復興基地、三民主義の模範省として再建しようとした。対岸に成立した共産党政権による「台湾解放」に対する恐怖が日ごとに増大する中、中国国民

党中央指導部では、内戦における敗北の原因を軍事的要因だけではなく、文化思想政策全般での敗北でもあるという認識を強めるにいたつた。

文芸方面においては、1950年3月に「時代性に富む文芸創作を奨励することで民衆の士気を鼓舞し、反共抗ソの精神を発揮する」ことを目指した中華文芸奨励委員会(文奨会)を創設する。反共抗ソを主題とする作品を公募し、優秀な作品には賞金を与えるとともに出版普及に努めた。そして1951年5月には、雑誌『文芸創作』が創刊される。発行者の張道藩は文奨会の主任委員で、1930年代以降中国国民党の文化政策の中核にいた人物であり、後に立法院長にもなっている。この雑誌は、文奨会の賞金授与作品や創作補助金対象作品を掲載するだけでなく、国民党政府の文芸政策を推進する任務を負っていた。文奨会の創作補助対象の規定にしたがい、小説だけでなく、詩歌、戯曲、鼓詞(歌物語)、木版宣伝画、文芸理論など広範なジャンルの作品を掲載していたことと、高額な原稿料とそれに伴う寄稿数の多さで1950年代を代表する文芸雑誌の一つであつた。

『文芸創作』そして金溟若「石教授」

『文芸創作』は日本国内の図書館では見当たらず、ほぼ全巻が台湾大学総合図書館にあ

るのは蔵書検索で知っていた。台湾での生活に馴れて一段落した頃、気をつけないとページが崩れ落ちてしまいそうな合訂本を手に取り閲覧を始めた。

掲載されている作品の主題について言えば、「祖国在呼喚」「保衛大中華」「血戦南日島」というような題名を見るだけでもその内容がうかがえる闘争的で反共抗ソ意識を鼓吹するようなものがほとんどで、その創刊主旨に呼応するものであった。

その中で「ちょっと変わった」作品に出会った。金溟若という作家の「石教授」という作品である。梗概は次のとおり。広東の大学で教鞭を執っていた石凌如は、病気の母の看護のため長江下流の郷里A城に二年ぶりに戻って来たのだが、思いがけずこの街は共産党支配地域となってしまう。中国文学系出身の石凌如は、自由と真理を愛し、「学術に携わる者は、政治に関与しない」という固い信念を持っていた。国民政府の統治下でも、学問の自由の気風が不足していると感じていたが、だからといって大学時代の同窓生のように「進歩」勢力へ接近することもしなかった。

共産党勢力下に置かれた高級中学（高等学校に相当）の国語教員としての招聘状が石凌如の許に届く。母の病を理由に招聘を一旦辞退するものの、執拗に就任を迫られ家族まで累が及ぶことを恐れた結果、やむを得ず招聘に応じることにした。そんな折、親友の宋大良が出身階級を問題にされ、共産党に逮捕されそうになるが、石凌如は彼を匿い、逃亡を助けてやった。その後、新制の高級中学で教鞭を執り始めるが、教材の選択について共産党支部から横やりが入ったり、授業中は共産党員の学生の扇動によって攻撃を受けるなど、石凌如は精神的な迫害に耐えきれなくなり、A城から逃れて小さな帆船に乗り、家族を伴い台湾を目指すことになる。

以上のように、表面的には共産党による迫害とそれからの逃亡という反共小説の体裁を一応は取りつつ物語は展開していくのだが、『文芸創作』に掲載された他の反共抗ソを題材とする作品のように「共産勢力＝邪悪、国民政府＝正義」の図式に完全に依拠したもの

ではないところが、この作品の「ちょっと変わった」ところなのである。

なぜこのような反共小説としては中途半端で、読者に思索を促すような作品が、全面的に反共抗ソを標榜する文芸雑誌の、それも創刊号の小説としては第一作目に掲載されたのだろうか。

作者の金溟若（1904 - 1970）は、本名を金志超という。浙江省瑞安の人。幼い頃、父とともに日本に渡り、東京にて教育を受けるが、関東大震災の直前に帰国し難を逃れる。上海大学卒業。上海で魯迅と知り合い、師事する。有島武郎の作品の翻訳があるほか、自らの作品集『残烬集』（上海北新書局、1928）も刊行している。1946年、魯迅の摯友であり、当時は台湾大学文学院中国文学系主任であった許寿裳の紹介を得て、中国文学系副教授に就任。1948年に許寿裳が殺害（謀殺の説あり）された直後、台湾を離れて郷里に戻っている。郷里が共産勢力の支配下に落ちた後、再び台湾に戻る。高校教員、新聞社で編集者・主筆などを務めるかわら、散文、小説を執筆し、川端康成や三島由紀夫などの日本文学の名著も翻訳、評論している。その人となりについては、最晩年に交流のあった在米の中国文学研究者夏志清の文章に「仇のごとく悪を疾（にく）む正直の人」との評がある。

ちなみに主人公の石凌如の名は、作者金溟若と、「石」と「金」（かたく、容易に変化しない）、「凌」と「溟」（混沌、暗い）、「如」と「若」（形容詞の後に付き、ある状態や様子を表す）と相通じていることと、作者自身の経歴と類似していることから、主人公を自らになぞらえていることは容易に想像がつく。

昭和町

先述の通り金溟若は、許寿裳の紹介で1946年台湾に渡った。「終日暴風雨、夜に風弱まる…庭の花木が折れ、裏の金宅の竹が我が家のほうへ倒れていた」などと許寿裳の日記にあるように、住まいは許寿裳の隣家であった。

許寿裳の家は現在の青田街6号にあった。台湾の住所地名は、一部については1945年11月に中国風に改められるが、その大部分が改名されたのは1947年2月に発生した228事件以降であるという。そのため当時は日本統治時代の呼び方である「昭和町」で呼ばれていたはずである。金溟若の長子である金恒杰の文章に「私たちは昭和町4番地2丁目に住んでいた」とある。私は金溟若と同じ町内に住んでいたのだ。

金恒杰の文章では、木造平屋の日本式住宅で畳敷きの茶の間にある出窓のガラスを通して目にする路地の風景や、父の金溟若が買って帰ってきた日本式の表札を取り囲んで家族であれこれ議論する場面や、引き上げを間近に控えた日本人が家財の整理のために路傍に蓆をひろげて売りに出している様子などが活写されていて、当時を偲ぶ恰好のよすがとなっている。

そして許寿裳教授殺害の報に触れ、「ひょっとしたら暗殺かもしれないな」と不安な表情を浮かべて父が呟くと、母が堪えきれず眉根を寄せて訴えた、「やっぱり帰りましょう、温州へ…台風に地震、今度は人殺しまで…こんなところにいたらいくら命があっても足りやしない…」まもなく一家は台湾を離れた。

魯迅、許寿裳の知遇を得て、すぐれた日本語の語学力と最新の文芸理論を備えた作家として活躍した上海時代と比べて、台湾での金溟若は不遇であった。石教授のように政治に関与せず学術に携わる者として超然と生きんと欲するも、激動の時代に絡め取られ、再度の渡台後、追い詰められたかのように執筆した小説は反共抗ソを標榜する文芸雑誌の創刊号に掲載されることになる。この作家の悲運に思いを致すとともに、不思議な縁を感じざるを得ない。「石教授」をはじめとする彼の作品については稿を改めて論じてみたい。

参考文献

- 夏志清「教育小説家金溟若（代序）」、『白痴的天才：金溟若記念小説集』晨鐘、1974.12
北岡正子ら編『許寿裳日記1940 - 1948』台湾大学出版中心、2010.11
金恒杰『昭和町六帖』允晨文化、2017.11
水瓶子『台北歴史散歩手帖』沐風文化、2018.7



Profile

国際人間学研究所 歴史学・地理学専攻 博士前期課程 M1

林 沙也加 (HAYASHI Sayaka)

1995年岐阜県生まれ。中部大学大学院国際人間学研究所歴史学・地理学専攻博士前期課程在学中。専門は日本中世史。現在、弘治・永禄年間における尾張国（現・愛知県の一部）の戦国大名織田信長の居城であった小牧山城や岐阜城に注目して、小牧山城の廃城理由について研究している。



弘治・永禄年間における織田信長の居城



はじめに

戦国大名は、居城を構えると特別な理由がない限り居城を移すことはない。しかし、織田信長は生涯において清須城・小牧山城・岐阜城・安土城と拠点を転々と移していた。織田信長の研究は、「美濃攻略」に焦点を置いて小牧山城について論じられている。研究結果として、小牧山城は美濃攻略の一時的な城であったと考えられている。しかし、近年の発掘調査により小牧山城に石垣や城下町が見つかったことから、千田嘉博氏を中心とした研究者が小牧山城を清須に代わる尾張国の近世都市であったと論じている。本稿では、織田信長が小牧山城・岐阜城に拠点を移す弘治・永禄年間の動向をみた上で、今後の課題について述べていきたい。

織田信長の行動

織田信長は弘治元年（1555）に尾張国下四郡の守護代・織田信友を清須城から追放し、清須城を居城とした。当時の信長の周辺では対立関係が多くみられた。弟・信行と対立しており、弘治2年の稲生の戦いで勝利し、翌年には信行を殺害した。更に、浮野の戦い（1558）や岩倉城の戦い（1559）でも勝利し、尾張国の統一を果たした。駿河国（現・静岡県の一部）・三河国（現・愛知県の一部）を領域としていた今川氏とは、信長が清須に拠点を移す前から対立していた。永禄3年（1560）の桶狭間の戦いで今川義元を打ち取り、今川氏を弱体化させた。桶狭間の戦いの後に、三河国の松平元康（後の徳川家康）と清須同盟を結成した。美濃国（現・岐阜県の一部）とは、天文17年（1548）に斎藤道三の娘・濃姫と政略結婚をしたことで関係は良好であった。しかし、弘治2年（1556）に斎藤道三が自害すると、

家督は子・義龍に受け継がれ、信長と対立するようになった。義龍が早くに亡くなると、家督は義龍の子・龍興が受け継ぎ、信長は隙を突き美濃攻略を開始した。当初は、墨俣に拠点を置き、西美濃側から攻略する戦略であったが、犬山城主・織田信清が斎藤氏と手を組んだために、美濃攻略前に犬山を攻略し、尾張国を統一した上で安定させる必要が生じた。そのため、永禄6年（1563）に拠点を小牧山城に移した。その城から犬山城・稲葉山城を攻略すると、信長は尾張国を統一し、稲葉山城を改修し岐阜城と改め、岐阜城を新たな居城とした。その後、伊勢国（現・三重県の一部）や越前国（現・福井県の一部）の朝倉氏、近江国（現・滋賀県）の浅井氏を攻め、天下統一に向けて躍進していった。

城の役割

戦国大名の居城である城は、防御機能を備えており、戦国期においては山城を拠点とする武将が多い。戦国期の城郭の特徴としては、山城や守護が拠点としていた館城が挙げられる。しかし、織豊期になると石垣が見られ、更に寺院や公家屋敷に多用されていた礎石建築が見られるようになった。岐阜城や安土城のように豪華絢爛な見た目も重視された城も登場した。織豊系城郭は、信長が楽市楽座といった経済政策を行ったように経済拠点として立地されたとも考えられている。

城郭の周りを囲むように家臣の屋敷が立地し、その周囲に城下町が展開されていた。また、発掘調査より城下町からは陶磁器などといった生活用品が見つかっている。近年の発掘調査により、広範囲にわたり小牧山城下に城下町が展開されていたことが判明しているため、美濃攻略のための一時的な城であったと考えら

れていた小牧山城下は新たな都市であったと考えられるようになった。

おわりに

信長は、美濃攻略を終えて拠点を小牧から岐阜に移すと小牧山城は廃城となった。信長は、岐阜に拠点を移すと美濃国の西側を集中的に攻めていった。しかし、戦国期の拠点は、地域統一をする上で拠点を移したとしても以前の拠点はそのまま置かれていた。信長が拠点とした城の中で唯一廃城となった城が小牧山城である。近年の研究では、小牧山城の見方が一時的な砦から近世都市へと変わっている。小牧山城が美濃攻略の一時的な砦であったのであれば、美濃攻略という目的を果たしたために廃城となったという理由に納得がいく。しかし、小牧山城が近世都市であったのであれば廃城した理由も変わってくるのではないかと考えたため、今後は小牧山城が廃城となった理由を究明したい。

その上で、さしあたっては、研究史をまとめていきたい。信長の研究は多く存在しているため、年代別に小牧山城など研究がどのようになされてきたのか整理していく。次は、発掘結果をまとめることである。城下町の研究では、別々の発掘地点から異なる意見が見られるため、それぞれの城・城下町の過去の発掘調査を総合的に捉える。その上で、弘治・永禄年間の信長の政治的状況や経済政策などを踏まえながら、小牧山城が廃城となった理由について考察する予定である。

参考文献

池上裕子『人物叢書 織田信長』吉川弘文館、2012年
仁木宏・松尾信裕編『信長の城下町』高志書院、2008年
千田嘉博『信長の城』岩波書店、2013年
斎藤慎一・向井一雄著『日本城郭史』吉川弘文館、2016年



Profile

国際人間学研究科 言語文化専攻 博士後期課程1年

後藤 克己 (GOTO Katsumi)

1948年生まれ。2010年情報通信系の会社を退職後、第2の人生として英米文学／文化に親しむこととし、2015年4月、本研究科／専攻の前期課程に入学、2018年3月に修了し引き続き後期課程に進学。専攻は(計量)文体論。C. Dickensの*The Mystery of Edwin Drood*を中心に、関連作品の文体比較、著者推定などについて研究している。



多変量分析手法を用いた*The Mystery of Edwin Drood*の続編の著者推定



はじめに

米国人 Thomas Power James (以下、James) は、Dickens の遺作となった *The Mystery of Edwin Drood* (以下、原典) に続編を加えた「完全版」を 1873 年に発表し、この続編を「Dickens の霊」による作品とアピールしている。以来、W.H.B.、George F. Gadd、Arthur Conan Doyle、Richard Wolkomir 等が批評を加えているが、それが Dickens の遺作といえるかどうかについて、確定的な結論は未だ得られていない。本研究は、計量文体分析において文体比較／著者推定に多く用いられている多次元尺度法(MDS)およびクラスター分析により、続編の著者が「Dickens の霊」といえるかどうかを明らかにしようとするものである。

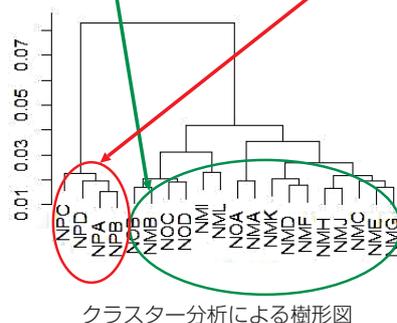
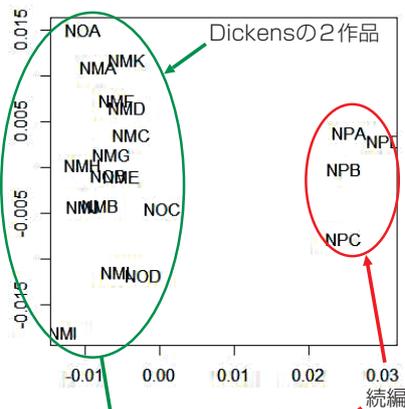
研究方法

分析するコーパスは、原典と続編に、やはり Dickens の作品で、原典(1870年)と発表時期に近い *Our Mutual Friend* (1864～5年；以下、OMF) を参照用に加えた3作品とした。各テキストから発話部を除外した後、規模見合いでそれぞれ4～12のサブコーパスに分け、レマによる語彙頻度を抽出した。さらに、Hoover の先行研究を参考に、1作品に70%以上偏在する語、固有名詞および人称代名詞を除外し、頻度上位50語か

ら1,000語の7種類の語彙データで分析した。

分析結果

分析した語彙数によって結果に大きな差異はなかった。以下の2つの図は上位500語の語彙データによるものである。



クラスター分析による樹形図

図中サブコーパスラベルの略語は、先頭のNは語りの語彙のデータであること、2つ目のOは原典、Pは続編、MはOMFを示し、3つ目のA～Lは各コーパス内の識別である。

この2つの図は、Dickensの2作品は語彙嗜好の類同性が高く、それらと続編とは明らかな差異があることを示している。さらにクラスター分析では各サブコーパス間の異同性をある程度比較評価できるが、語彙数100語～1,000語で殆ど同じ結果を得た。また、その1,000語までの分析の中で中核となったと考えられる、頻度上位100語に含まれる語彙は日常的／平易な語であり、作者が意識的に選ぶ語というより、無意識的に用いる語と言えそうである。

以上、1,000語までの高頻度語を包括的に計量分析して得た客観的根拠に基づき、続編の著者を「Dickens の霊」とする James のアピールは疑わしいものと結論づけられる。

おわりに

作者の自然な語り口を反映すると思われる高頻度語を分析することで、著者推定は可能と思われるが、作者の文体研究では、作者が意識的に選ぶ語／言い回しも重要なテーマになる。今後研究対象作品を広げるとともに、そのような観点にも注目して研究をすすめていきたい。

第9回 教員研究会を開催

第9回教員研究会が2018年7月25日に開催された。今回は、先ず国際関係学専攻の中野智章教授が「オックスフォード大学東洋学部の四半世紀：エジプト学徒としての経験から」というテーマで発表した。中野教授は、人々が用いた言語の習得なくして、当時の文化や社会の研究はあり得ないという強い信念を持つ同学部に進んだ際に象形文字を習得し、同じく意味をもつ記号として使用される文様の研究から王のみが用いた文様の特定に成功した経緯などを報告した。また、心理学専攻の森田美弥子教授が「人は何故・いつ・どのように・心の相談に向かうのか」というテーマで発表した。長く大学の相談室などで心理相談に携わってきた森田教授は、心理相談を「いずれ別れることを目指した出会い」と位置付け、悩みや症状の軽減だけでなく、クライアントの発達・自立を促すような支援の重要性を強調した。

中部大学国際人間学研究科 主催

第9回 教員研究会

2018年7月25日 (水)
研究科委員会終了後 (17:30頃～)

人文学部会議室 (25号館2階)

中野 智章 教授
国際人間学研究科 国際関係学専攻
「オックスフォード大学東洋学部の四半世紀：
エジプト学徒としての経験から」

森田美弥子 教授
国際人間学研究科 心理学専攻
「人は何故・いつ・どのように・
心の相談に向かうのか」

院生・学部生の来聴を歓迎します。



第8回「院生の力」を開催

第8回「院生の力」研究報告会が2018年7月4日に開催された。4月に本学歴史地理学科から前期課程に進学した1名は卒業論文の概要を紹介し、本学言語文化専攻前期課程から後期課程に進学した1名は修士論文の成果と今後の研究の方向について発表した。指導教授のアドバイスや参加者からの質問・意見を交えながら興味深い議論が交わされた。



CHUBU UNIVERSITY
大学院国際人間学研究科 主催

院生の力

大学院生たちが、一般聴衆向けにわかりやすく研究内容を発表します。どなたでも参加自由ですので、ぜひ聞きにいらしてください。特に学部学生を歓迎します！

日時
2018年7月4日 (水)
15:20-16:50

場所
2522講義室

歴史学・地理学専攻 博士前期課程1年生 林沙也加 氏
弘治・永祿年間の織田信長の居城
コメンテータ： 水野智之教授 (国際人間学研究科歴史学・地理学専攻)

言語文化専攻 博士後期課程1年生 後藤克己 氏
多変量分析手法を用いた
The Mystery of Edwin Droodの続編の著者推定
コメンテータ： 大門正幸教授 (国際人間学研究科言語文化専攻)

中部大学国際人間学研究科

国際関係学、言語文化、心理学、歴史学・地理学の各専攻からなる国際人間学研究科は、人文系諸科学と社会系諸科学に架橋をかけて、人間と文化、民族と国家の研究のフロンティアを拡大し、グローバルな諸問題に挑戦できる知的創造的研究、および、さまざまな現場から広く社会貢献を目指した実践的研究ができる人間を育成し、研究成果を通して社会に貢献することを教育研究上の目的としています。



国際関係学専攻

科目【博士前期課程】

国際政治経済研究コース

政治経済研究特論/国際法特論/国際政治学特論/国際経済学特論/国際機構論/応用計量経済学/国際金融論/国際協力論/開発経済学特論/国際公共政策特論/発展途上国論/社会開発特論

国際社会文化研究コース

社会文化研究特論/文化人類学特論/国際社会学特論/国際ジェンダー論/比較文明論/比較環境論/比較社会史論/比較宗教論/地域社会文化研究特論

共通科目

研究方法論/臨地研究論/近代世界表象体系/文化相関の科学哲学/海外文献研究

特別研究

研究指導

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

国際政治経済学専門研究演習

国際社会文化論専門研究演習

国際比較文明論専門研究演習

心理学専攻

科目【博士前期課程】

心理学科目群

心理学研究法特論/知覚心理学特論/健康心理学特論

学校心理学科目群

認知心理学特論/社会心理学特論/発達心理学特論/臨床心理学特論/教育心理学特論/学習指導法特論/学校教育特論/障害児心理学特論/生徒指導特論/心理検査法特論/学校カウンセリング特論/教育統計学特論

特別研究

研究指導/課題指導

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

学習心理学専門研究/教育心理学専門研究/認知心理学専門研究/臨床心理学専門研究

言語文化専攻

科目【博士前期課程】

ジャーナリズムコース

研究基礎(情報収集、メディア・クリティシズム)/現代国家・制度特論/現代史特論/情報産業・流通特論/現代社会特論/社会心理学特論/情報技術とメディア特論/ジャーナリズムと倫理特論/現代の広報特論/報道記事作成技法/ドキュメンタリー作成技法/プロジェクト/研究指導

英語圏言語文化コース

応用言語学特論/英語教育法特論/英語学特論/英米文学特論/英語圏言語文化総論/研究指導

日本語日本文化コース

日本語学特論/日本語教育学特論/古典文学特論/近代文学特論/日本文化特論/伝承文芸特論/日本芸能特論/国語教育特論/研究指導

共通

近代世界表象体系/文化相関の科学哲学

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

メディア・コミュニケーション専門研究

英語圏言語文化専門研究

日本語文化専門研究

歴史学・地理学専攻

科目【博士前期課程】

歴史学コース

日本古代史特論/日本中世史特論/日本近世史特論/日本近代史特論/日本現代史特論/アジア史特論/中国史特論/ヨーロッパ史特論/アメリカ史特論/社会経済史特論/思想史特論/文化史特論/技術史特論/美術史特論/歴史学研究

地理学コース

経済地理学特論/歴史地理学特論/文化地理学特論/都市地理学特論/地理情報学特論/都市政策学特論/自然地理学特論/地誌学特論/地理学研究

共通科目

近代世界表象体系/文化相関の科学哲学

特別研究

研究指導

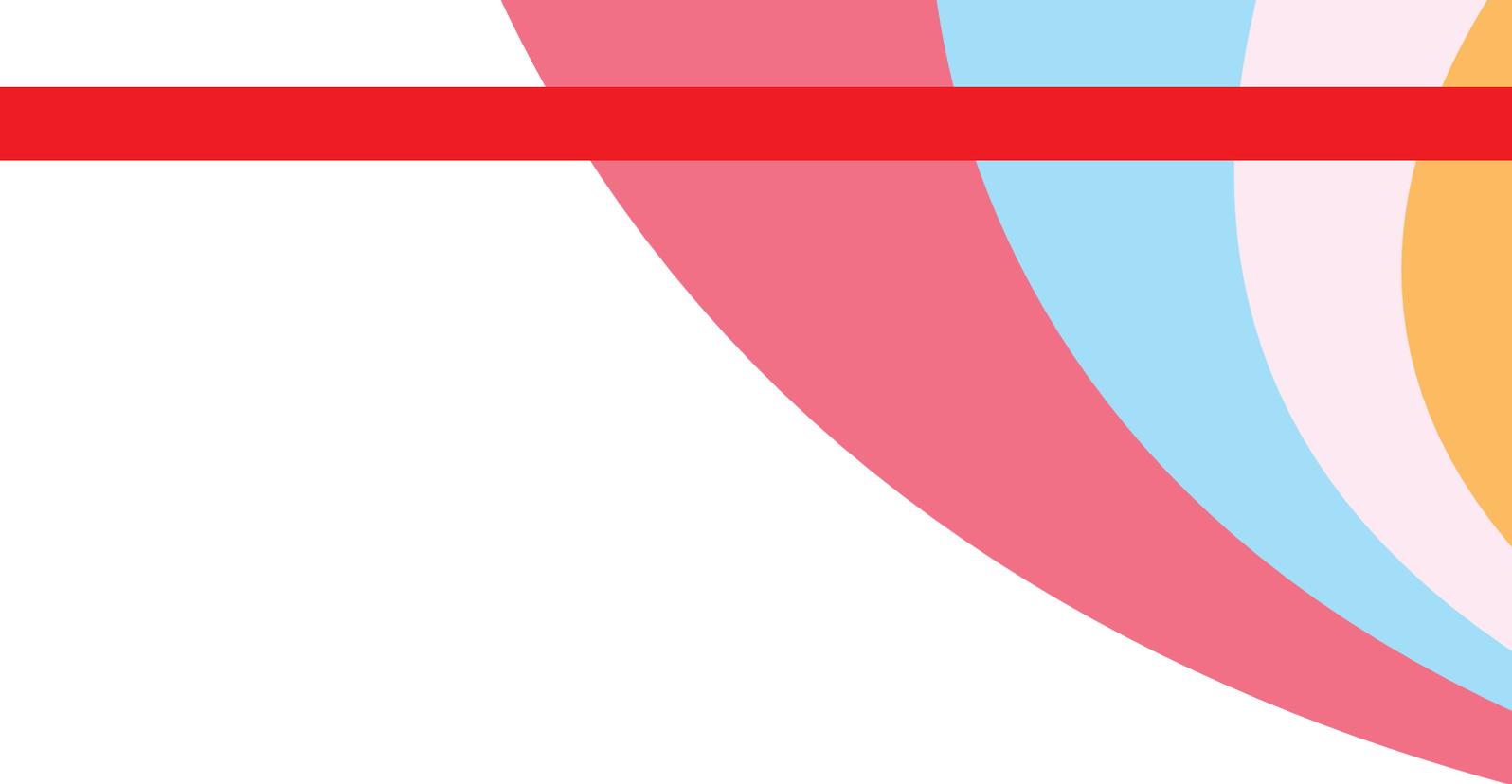
研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

歴史学専門研究演習

地理学専門研究演習

- 
-
- 発行：中部大学大学院国際人間学研究科
 - 編集者：柳谷 啓子
 - 発行日：2018年10月19日
 - 〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200
 - 中部大学国際人間学研究科（国際関係学部事務室）
 - 電話：0568-51-4079（直通） ●ファクス：0568-52-1325
 - 電子メール：inkn@office.chubu.ac.jp
 - 国際人間学研究科ホームページアドレス：
http://www3.chubu.ac.jp/graduate/global_humanics/